

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 12 日現在

機関番号：33915

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：平成 22 年度 ～ 平成 24 年度

課題番号：22531035

研究課題名（和文） ファシリテーターの育成を通じた教育力向上プログラムの開発

研究課題名（英文） Development of an improvement program on educational ability through cultivation of facilitators.

研究代表者 白井靖敏(SHIRAI YASUTOSHI)

名古屋女子大学 家政学部 教授

研究者番号：20267925

研究成果の概要（和文）：

本研究では、企業等で重要視されているファシリテーター的な役割を、グループ学習に加えることで、グループ学習におこりがちな知識の偏りを避けることや、グループ構成員すべてが活発にディスカッションできる状況をつくり出せる教育力向上プログラムを開発した。これを用いた実践の結果、ファシリテーターを事前に訓練させることで、ディスカッションの進行や意見の整理が進み、リーダーの負担感が軽減され、それぞれの役割が明確になり、ディスカッション全体が活性化するなど、プログラムの有効性が検証できた。

研究成果の概要（英文）：

In this study, we developed an improvement program on educational ability to create the situation where all the group members could discuss lively by positioning a facilitator to each group.

The facilitators made arguments clear and provided opportunities for each member to speak to all the group members, which is utilized in companies and is regarded important.

As a result of experiencing this program, beforehand, the facilitator was able to play its role well in group learning, therefore, a burden on the leader in a group decreased, discussion went smoothly and the coordination of opinions advanced.

Because the facilitator joined the group, the role of the leader became clear. The whole discussion became active, and we conclude that this program is effective.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
22 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
23 年度	800,000	240,000	1,040,000
24 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：教科外教育、教員養成、グループ学習、ファシリテーター

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

## 1. 研究開始当初の背景

現在の学習指導要領において、「総合的な学習の時間」などを通して、「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力」が身に付くよう指導がなされてきている。しかしながら、いまの大学生が、入学前にこうした能力を十分身につけているとは言えないことは、事前調査からも分かっている。過去に実施した現職教員の研修においても、グループ学習やグループワークなどの学習者主体の授業が行える技術を身につけた教員が少ないという実態があることから、教員養成のなかで、グループ学習を積極的に取り入れ、グループを構成する個々の学習者が主体的にかかわり、自らが学習を進めていく体験的な教育プログラムの開発が必要と考えている。

## 2. 研究の目的

平成 19、20 年度に、文部科学省・三重県教育委員会主催の教員研修（「総合的な学習の時間」コーディネーター養成講座）を担当し、教員自身がグループ学習を体験する体験型の研修プログラムを開発して実施した。その結果のなかで注目したひとつに、グループ学習の効果を高めるには、ファシリテーターの役割が重要であることが分かった。ファシリテーターは、企業等で行われている研修では一般化しつつあるが、学校教育では、まだ、なじみが少ない。グループを構成する個々の学習者が主体的にかかわり、効果的な学習活動を行うには、グループリーダー、ファシリテーターなどのグループ内役割分担が意味を持つと考える。

本研究では、グループ学習の効果を高めるファシリテーターの役割に注目した。将来、教職を目指す学生の教育力の向上を図るため、学生自身にグループ学習を継続的に体験させながら、ファシリテーターの重要性を認識させ、学習者主体の授業が展開できる力を身に付けることができる教育プログラムの開発を目指す。3年間の研究期間中、教職選択学生を対象として、研究代表者および分担者が担当している教職関連科目において、本プログラムの実践検討を行う。教職に就くことを希望している学生自身が、学習者主体の授業の価値を理解してこそ、次世代へとつながり、教育の質的変革が進み、これからの教員養成の充実に寄与できると確信している。さらには、大学における課題探究や問題解決等の諸能力を中核とする「学士力」をも養える。

## 3. 研究の方法

## (1)平成 22 年度

これまでの研究成果を教員の能力向上の視点で整理・検討した。そして、教職選択学生を対象とし、ファシリテーターの育成を通じた教育力向上プログラムを開発した。これを実践するため、具体的な大学・教職課程における授業内容・方法を検討した。

## (2)平成 23 年度

平成 22 年度における授業実践の結果を、①講義形式の授業および、演習形式の授業におけるグループ学習等の授業内容・方法、②グループ学習におけるファシリテーターの育成、③授業時間外での継続的な学習を促すシステムの活用など、それぞれの観点で検討し、成果や問題点を整理し、前年度と同じ授業科目で、改善した教育プログラムを用いて授業研究を行った。

## ③平成 24 年度

平成 22 年度および平成 23 年度の 2 年間にわたる授業実践の成果と課題を整理して、さらに改善した授業を平成 23 年度と同じ授業科目で行い、成果を検証した。特に、授業時間外におけるグループ学習の継続性とファシリテーターの役割とその効果を検証した。

## 4. 研究成果

前述の研究計画のうち、平成 22 年度、23 年度の 2 か年に実践したファシリテーターの育成を通じた教育力向上プログラムの実践と検証を主としてまとめる。

(1)グループ学習を活性化させるための教育プログラム（ファシリテーター育成のための体験型学習）の効果

教職科目「教育の方法と技術」（名古屋女子大学家政学部 2 年、2 クラス）を対象として、ファシリテーター育成プログラムによる授業実践を行った。ファシリテーター経験クラス（A:8 グループ）と、特に特別プログラムを用いないファシリテーター非経験クラス（B:5 グループ）とに分け対照とした（24 年度も A が 8 グループ、B が 5 グループ）。

クラス（A）では、ファシリテーターとリーダーを全員が体験できるよう、20 分間のマイクログループディスカッション（23 年度は、ディスカッションの時間を 35 分にしたのでミニディスカッション）を設定した。ファシリテーターとリーダーは、それぞれグループ内でテーマ別に輪番に分担し、すべての学生が、ファシリテーター、リーダーをとともにすべて体験できるように進めた。ファシリテーターは、リーダーと事前に相談しながら、ファシリテーションの準備として、事前調べ、

会議の進行表の作成、予想される意見への対応表の作成、成果発表としてレポートの作成などを課した。

ファシリテーター非経験クラスは、小中高で広く行われている一般的な学習方法を用いたグループディスカッションを行った。ディスカッションにおける役割分担もグループ内で考えさせた。ただし、リーダーとファシリテーター(司会的役割)は決めるよう指示した。

半期 15 回のうち前半 7 回で前述のファシリテーター育成のためのプログラムを終え、後半 8 回では、経験クラスも非経験クラスも課題設定から、ディスカッション、まとめ、プレゼンに至る一連のグループ学習を実施した。

ファシリテーター経験クラスと非経験クラスとの違いを、後半 8 回の実践からまとめる。ディスカッションの進行については、経験クラスでは「できなかった」「あまりできなかった」と回答した学生はいない(図 1)。

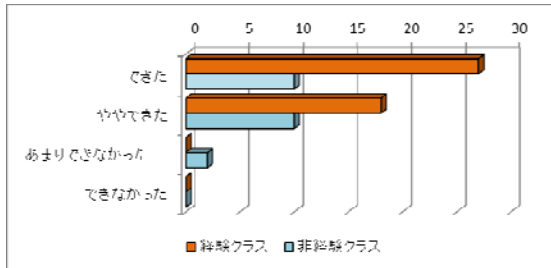


図 1 ディスカッションの進行状況

ファシリテーターの役割を明確化することでリーダーの「負担感」は、想定した通り軽減されたが、「達成感」、「満足感」も十分に得られていなかった(図 2)。ファシリテーターについてみると、ほぼ想定通り、経験クラスの「負担感」が増した。それと同時に「達成感」「満足感」も増加した(図 3)。しっかりと役割を果たせば、ある意味、当然の結果であろうが、別の見方をすれば、ファシリテ

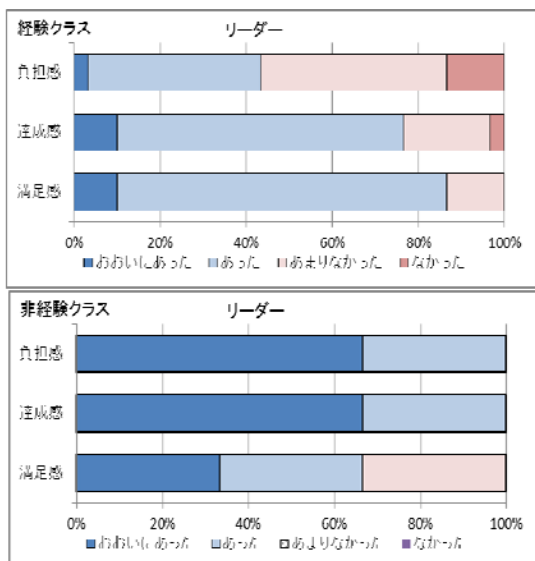


図 2 リーダーの負担感、達成感、満足感

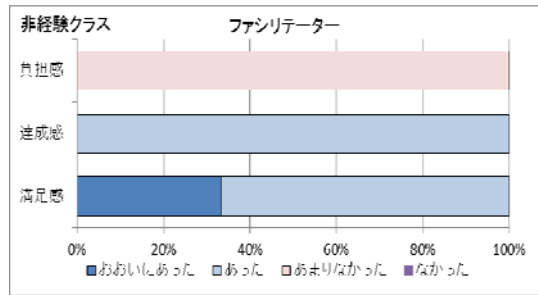
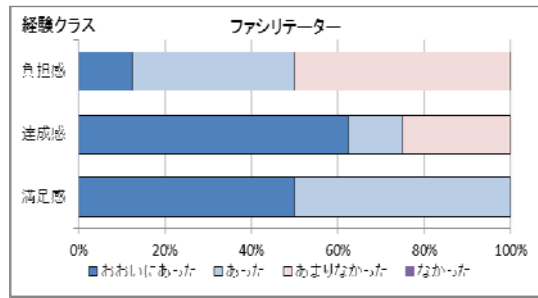


図 3 ファシリテーターの負担感、達成感、満足感

ーターを明確化したことによって、従来型のグループ学習で、リーダーが担っていたと思われるディスカッションの進行や整理、まとめなど仕事のほとんどを、ファシリテーター役が取り込んだ格好となったとも考えられる。ファシリテータートレーニングは効果があったものの、これまで、本来、リーダーが果たさなければならない仕事が正しく理解されていなかったことも分かり、ディスカッションのなかで、リーダーが自分の仕事を見失ったのではないかと思われる。非経験クラスでは、ファシリテーターを司会的な役割としては分担していたが、結果として、従来型のリーダー主導型となっていた。

ファシリテーターは、グループ構成員全員からの意見の引き出しなどにより、個々の学習者が人任せにせず、議論へ積極的に参加する態度が身につく、学習そのものの活性化に大きな力を発揮し、さらには、発言できないなどの不満が解消できたことなど、事後アンケート結果から明らかになった。知識の深まりや広がりやの面では、グループ内で議論された主要なキーワードをカウントし、その平均および学生のアンケート記述内容から、ファシリテーターの存在効果が若干見られた。平成 24 年度も、教育プログラムに改良は加え、平成 23 年度と、ほぼ同様の実践を行い、ファシリテーターに関する効果が検証できた。2 年間にわたる実践から、グループ学習におけるファシリテーターの効果は、学習内容の深化や広がりより、むしろ、グループを構成している学習者の全員が活発にディスカッションに参加させることができたこと、言い換えれば、一言も発言できない学習者がなく、発言者にも偏りがなくなったことである。このことは、グループ学習の質や満足度を高め

る重要なファクターと考えられる。学習内容の深化や広がりへのより重要なファクターと言えないのは、学習そのものの成果で見たときは、たとえ、発言者が、ある学習者に偏っていたとしても、グループ学習による成果の評価が高くなるケースがあるからである。

(2) 課題制作型授業におけるファシリテーターの効果

教職科目「教育の方法と技術」(名古屋女子大学文学部児童教育学科幼保コース4年)を対象として、平成22年度は、まず大学でのグループ学習の実施状況や課題について調査した。グループ学習は、多くの授業で取り入れられていたが、学習内容を深めるためには、進め方やグループ作りなどの課題があることが明らかになった。同年、グループ学習の効果的な運営を検討するため、多様なメンバーを配置すること、ファシリテーター的な役割を設定すること、グループ作り活動を取り入れることを意識したグループ学習と、そのような配慮をしていないグループ学習(いずれもグループ成果物を求める)を実施し比較検証した。役割設定など配慮したグループ学習では、学生の意識が向上し、学習のテーマを掘り下げた学習状況が見られた。多様なメンバーを配置し、ファシリテーターなどの役割を意識させ、グループ作り活動を行うことでグループ学習の効果が高まることが示唆された。

平成23年度は、昨年と同様のグループでの成果物を求めるグループ学習において、ファシリテーターのみに着目し、ファシリテーターをグループに置くことにより効果的な学習が進むことを検証した。保育活動で活用できる電子紙芝居教材の制作をグループ課題とし、ファシリテーターを置かないクラス(A)と置くクラス(B)で、学習状況や作品、学習の深まりについて比較した。

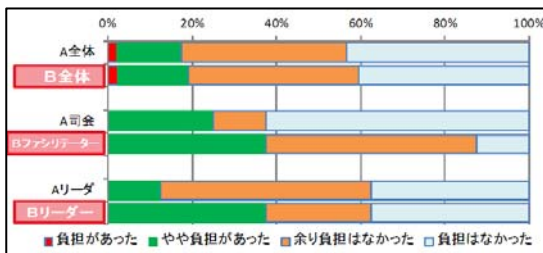


図4 両クラスの役割ごとの負担感の比較

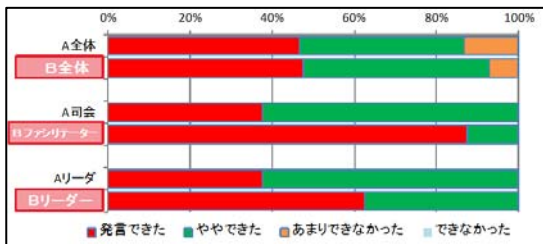


図5 両クラスの役割ごとの参加度の比較

活動の負担感や参加度は、Bクラスのファシリテーター役が他に比べ大きかった。

また、ファシリテーターやリーダー、それぞれが役割を果たしていたのがBクラスの担当者であることや、討議での発言の多さ、振り返りアンケートのコメント量の多さもBクラスが多く、またグループ作品の評価もBクラスが高かった。

表1 両クラスの効果の比較

クラス	グループ	Aクラスの司会や、ファシリテーションを行っていたか	各グループのリーダーは、決断を下していたか	討議での発言度	電子紙芝居についてコメント字数	模擬授業についてコメント字数
Aクラス	1	×	◎	○	123	71
	2	△	×	△	○161	105
	3	×	×	◎	129	74
	4	○	×	×	△159	98
	5	△	◎	○	103	65
	6	×	◎	△	113	80
	7	×	×	◎	△144	117
	8		△	×	84	53
Bクラス	1	△	◎		○180	△130
	2	◎	◎	○	○190	114
	3	△	△		○195	○188
	4		◎	△	◎239	114
	5		○	△	○161	98
	6	◎	○		○182	○161
	7		△	◎	◎229	△151
	8	△	◎	○	◎226	△130
Aクラス平均					127	83
Bクラス平均					200	136

以上の結果から、グループにファシリテーターを置き、リーダーとの役割を明確にすることによって、グループ学習が活性化し、次のようなファシリテーション効果が得られたと言える。

①ファシリテーター役とリーダー役を配置し、役割を明確にすることで、グループ討議への参加意識が高まった。

②どのグループもグループ討議が活性化し、「議論を人任せにする」「話し合いが深まらず楽しくない」などグループ学習が成り立たず失敗に終わるような状況を回避できた。

③ファシリテーションによって多様な意見交換が促進され、制作を進めていく過程において学習の深まりが得られた。

④最終的な成果物であるグループ作品に、グループ討議での多様な意見交換の成果が反映された。

平成24年度は、ファシリテーターの育成に手間がかからぬよう、ファシリテーションを絞った簡易ファシリテーターを配置したグループ学習の効果を調査した。ファシリテーターの担当者には、「メンバー全員が等しく発言できるように、発言しない者には促し、

発言の多いものは若干抑える」ことだけを指示した。対象としたのは、高田短期大学子ども学科1年科目「コンピュータ」で幼児向けコンテンツ制作の作品案を検討するグループ学習である。ここに簡易ファシリテーターを配置した。対照とするのは、同短期大学オフィス人材育成学科1年科目「表計算実務」でアンケート調査項目を検討するグループ学習と、同学科2年科目「データベース実務」でまとめの課題として構築するデータベース案を検討するグループ学習である。いずれも発言回数、発言のしやすさ、満足度、そして最終の成果物の評価などを比較調査した。

結果、簡易ファシリテーターを置いたコンピュータの授業では、発言回数の少ない学生が他に比べ少なく、また作品の評価と発言のしやすさとが相関があった。

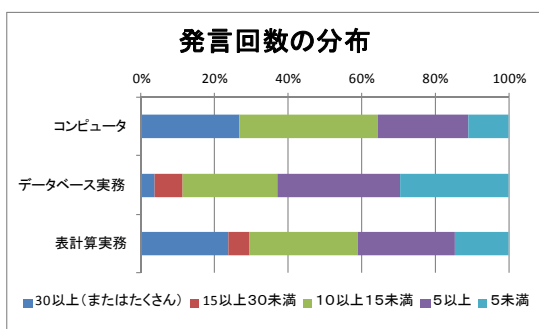


図6 発言回数分布の比較

表2 作品と発言のしやすさ等との相関

成果との相関	発言回数	発言しやすさ	満足度
データベース実務	0.16	0.58	0.50
表計算実務	0.51	-0.06	0.04
コンピュータ	0.22	0.65	0.55

このことから、ファシリテーターをおくことで、発言ができない学生を減らし、多様な発言がなされ、それが作品や授業の満足度につながったと考えている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

①白井靖敏、鷺尾敦、下村勉、大学教育におけるグループ学習のファシリテーション効果、名古屋女子大学紀要、第59号、2013、113-122

②鷺尾敦、白井靖敏、下村勉、グループ学習におけるファシリテーター役配置の効果、高田短期大学紀要、第31号、2013、119-130

③遠山佳治、石倉瑞恵、白井靖敏、羽澄直子、原田妙子、幸順子、大学における効果的な授業法の研究5～多様な学習成果の評価方法の開発(続)～、名古屋女子大学総合科学研究第6号、2012、59-60

④白井靖敏、鷺尾敦、下村勉、グループ学習の現状とファシリテーターの役割、名古屋女

子大学紀要58号、審査有、2012、109-118

⑤鷺尾敦、グループ学習の効果をあげるためのグループ作り、高田短期大学紀要30号、2012、55-66

⑥白井靖敏、アクティブラーニング(グループ学習)の経験に基づく学習タイプ、名古屋女子大学紀要57号、審査有、2011、117-125

〔学会発表〕(計4件)

①白井靖敏、グループ学習におけるファシリテーションの有効性、日本教育工学会第28回全国大会、2012年9月15日(土)、長崎大学・文教キャンパス

②鷺尾敦、グループ学習におけるファシリテーターの影響、日本教育工学会第28回全国大会、2012年9月17日(月)、長崎大学・文教キャンパス

③鷺尾敦、高等教育におけるグループ学習を深めていくために(1) アンケート調査結果からの考察、日本教育工学会第27回全国大会、2011年9月18日(日)、首都大学東京

④白井靖敏、高等教育においてグループ学習を深めるために(2) リーダーとファシリテーターの役割、日本教育工学会第27回全国大会、2011年9月17日(土)、首都大学東京

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

白井靖敏 (SHIRAI YASUTOSHI)

名古屋女子大学・家政学部・教授

研究者番号：20267925

(2) 研究分担者

鷺尾 敦 (WASHIO ATSUSHI)

高田短期大学・オフィス人材育成学科・教授

研究者番号：30259397

下村 勉 (SHIMOMURA TSUTOMU)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：80150217